

9月6日

語凡

「秋来ぬと…」。気付くと古今集の有名な歌より季節は進んだ。風の音だけではなく、稲田の実りや街の装いから、目にもさやかに秋の訪れを感じられるこの頃である▼そんな時分にふさわしい澄んだニュースに接した。「アジアのノーベル賞」といわれるマグサイサイ賞の今年の受賞者に、ベトナムを中心に失明の予防に尽力してきた眼科医の服部匡志さん(58)が選ばれた▼日差しの強い東南アジアでは白内障など眼病のリスクが高い。貧困から十分な医療が受けられずに失明する人が多く、服部さんは無償の手術などで救ってきた。20年にわたり約2万人を診たという「ベトナムの赤ひげ先生」だ▼京都と縁が深い。府立医科大学を卒業後、京都での学会で知り合ったベトナム人医師の求めで技術指導に渡り、現地の厳しい実情を放っておけなかったという。自らの報酬も医療機器の購入に充てる。手弁当での診療に共鳴し、同医大関係者でNPOを設立して活動を支援している▼歴代の同賞受賞者には、アフガニスタンで医療・生活の支援に半生をささげた故中村哲医師もいる。国家の力に頼らずも、地道に、誠実に人々の困難に寄り添う国際貢献が各地で続けられている▼目を背けたくなる世界の中で、こうした確かで、さやかな「光」に眼を見開きたい。

令和4年9月6日 京都新聞